追悼　小石秀夫先生

酒井　シヅ

小石秀夫先生が平成21年3月22日（日）に眠るように逝去された．享年84歳であった．先生は大正14年1月5日に京都市中京区釜座通竹屋町下ル亀屋町335に誕生された．そこは京都の蘭学の創始者小石玄俊（1743–1808）が江戸時代に居を定めた場所であり，直系の当主が代々にわたって住んだところである．玄俊の蘭学塾・究理堂には頼山陽ら著名人が訪ね，京都の医学，文化の中心地となり，全国から多くのが学者，文人が訪ねた所でもあった．それだけに小石家には玄俊はもちろん，続く玄瑞，大五郎の歴代当主の関わる書物，文献資料，器物などがそのまま保存されている．小石秀夫先生は常々「これらの資料がこの場所に保存されることに重要な意味がある」といわれ，そのために並々ならぬ努力と苦労をされてこられた．

医家に生まれた秀夫先生は，昭和23年に京都府立医科大学を卒業されたが，臨床家の道は選ばず，基礎医学を専攻されて，昭和30年大阪市立大学家政学部講師（栄養生理学）に就任されて，終生，タンパク質栄養の研究に従事された．昭和32年に助教授に昇進．昭和37年から2年間，アメリカ合衆国ニュージャージ州立ラトガース大学に留学，帰国後，栄養生理学講座の主任教授となり，昭和63年の定年まで33年間，ヒトの低タンパク質適応に関する研究，教育につくされた．特筆すべきことは，長年にわたって施設に収容された高齢者や低所得者の学童の栄養摂取量と代謝機能との関係を調査され，その結果得たデータが発育期のタンパク質所要量策定の根拠として用いられていることである．また，先生は昭和53年から3年間，パプアニュギニアの高地にすむ人びとの栄養調査隊の隊長として現地に行き，現地人が芋などの低タンパク食で，文化人に勝る体力を得るメカニズムの解明に取り組まれた．これらの研究の結果は国際的に高く評価されて，日本栄養・食糧学会賞および功労賞，日本栄養改善学会の学会賞が授与された．さらに平成15年に勲三等旭日中綬章を受賞された．

小石秀夫先生

筆者は小石家資料を整理することを目的に，京都のお宅をたびたび訪問して，貴重な資料を拝見，調査する機会を得た．先生はいつも変わらぬ穏和な態度で接して下さった．うかつにも，この追悼文を書いていて，はじめて栄養学の分野ですぐれた業績をたくさん残されたことを知ったが，すぐれた学者であられたからこそ，筋の通った態度で接していただけたのだと感得したのである．